

## 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 鈴木 遥	提出日：平成 24 年 1 月 4 日
<b>東南アジア研究所における職名：</b> *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手 <input checked="" type="checkbox"/> ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
<b>派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名(日本語で記載)及びカウンターパート名)：</b> インドネシアリアウ州・リアウ大学・Haris Gunawan氏 *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所○をつけてください。 <input checked="" type="checkbox"/> 大学・研究機関・企業・その他)	
<b>派遣先の研究機関等での職名：研究員</b>	
<b>派遣期間：</b> 平成 23 年 10 月 9 日 ~ 平成 23 年 12 月 4 日 (派遣日数：57 日)	
<b>研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可)</b> <input type="checkbox"/> ①研究・実験 <input checked="" type="checkbox"/> ②フィールドワーク <input type="checkbox"/> ③セミナー <input type="checkbox"/> ④インターンシップ <input type="checkbox"/> ⑤サマースクール等の講習 <input type="checkbox"/> ⑥学会出席 <input type="checkbox"/> ⑦単位取得等 <input type="checkbox"/> ⑧その他	
<b>研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。)</b> <input type="checkbox"/> ①人文学 <input type="checkbox"/> ②社会科学 <input type="checkbox"/> ③数物系科学 <input type="checkbox"/> ④化学 <input type="checkbox"/> ⑤工学 <input type="checkbox"/> ⑥生物学 <input type="checkbox"/> ⑦農学 <input type="checkbox"/> ⑧医歯薬学 <input type="checkbox"/> ⑨総合領域 <input checked="" type="checkbox"/> ⑩複合新領域	
<b>派遣の概要(500~700字程度)</b> <p>本派遣の目的は、インドネシアリアウ州における森林管理及び木材生産・流通活動の変遷と現状、人々による木材利用における親族関係や社会組織について現地調査を実施することであった。本派遣は、インドネシアの森林保全問題について従来なされてきた森林という場に規定された議論に対して、森林から伐り出された後の木材をめぐる社会活動に注目し、より広い社会的文脈の中でこの問題を検討する新たな論点を展開しようとする本研究全体の一部として位置付けられる。本派遣は、本研究の主要対象地域である東南アジア有数の木材生産地域インドネシア東カリマンタン州における事例を比較検討するために、同州と同様にインドネシア外島に位置し、1990年代後半から木材の生産・流通活動が社会の形成と発展に深く関連してきたインドネシアリアウ州において現地調査を実施するものであった。現地では、林業局等の関連機関での聞き取り及び資料収集、カウンターパートをはじめリアウ大学の農学、建築学、社会学の研究者と議論し、木材を軸とした文化=社会の分析視点や、今後の村落調査について議論した。</p>	
<b>事業に係る研究成果(500~700字程度)</b> <p>第一の成果は、リアウ州における木材生産・流通活動に関する森林政策の近況を明らかにしたことである。林産物の利用とモニタリングに関する機関(Balai Pemantauan dan Pemanfaatan Hutan Produksi)において、リアウ州の木材生産・流通活動の現状及びこれらに関連する森林政策の現状と課題について担当者と議論し、関連資料を入手した。国レベルの森林政策では森林保全と違法伐採規制が進められ、木材生産・流通活動は縮小される傾向にある。一方でリアウ州の森林政策においては、住民による小規模な木材生産・流通活動を持続させるための法整備等が、州独自に進みつつあることが明らかになった。これは、従来の商業伐採とは一線をおいた、地域内の木材需要と木材供給活動を支える社会組織を持続するシステムとなりうるとも考えられた。しかしながら、州内における木材をめぐる住民の社会活動の実態は、違法伐採問題をからんだものでもあるために今だほとんど把握されておらず、今後、関係者への聞き取り調査等が不可欠だと考えられた。第二の成果は、リアウ大学社会学部Yusuf教授の主催するムラユ文化と木造建築に関するセミナーで研究発表をし、同教授を含む現地研究者と議論をし、木材を軸にムラユの伝統木造建築を分析することにより生態を取り込んで社会=文化を理解しようとする視点を受け入れてもらうことができたことである。今後は、木材をめぐる住民の社会活動を聞き取り調査等から詳細に検討し、本派遣成果も含めて論文として公表するとともに、現地研究者とのムラユ木造建築に関する共同研究の実施に向けてさらに調整を進める。</p>	